

~~~~~いま、子どもたちは~~~~~

## ははこ 母子のいま

### (3) 社会性をめぐる 子どもの状況

山崖 俊子

はじめに

筆者は大学で「人間関係論」の講座をもっている。受講希望者は毎年かなりの数にのぼり抽選をしているほどである。彼女らの受講希望の理由を聞くと、その殆どがこれまでに友人関係等の対人関係に何らかの辛い体験をしてきており、今後そのような辛い思いをしないうで済むための方法を学びたいというのである。現代の若者たちは一見スマートで、ある部分の「社会性」はむしろ十分過ぎるほどに育っていると一般に思われている。しかし意外にも彼らは対人関係に関わる自分自身の能力に大きな劣等感を抱いているのである。

一方、乳幼児をもつ母親も同様に我が子の「社会性の発達」というテーマに強迫的にとらわれている。それは同世代の仲間の中で育てなければ社会性は育たず、取り返しがつかないことになるという思い込みである。それがいわば「公園デビュー」といった言葉を

生み出した。

また、幼稚園に通園している子どもをもつある母親は一日の内ですごい一番不安であり緊張するかとというと、幼稚園のお迎えの時だという。それは、いわば子どもの「アフターファイブ」の過ごし方が決められるのがお迎えの時なのだそうだ。すなわち、幼稚園から帰ってからの過ごし方については、子どもが決めるのではなく母親同士の繋がりで決められるということらしい。従って、今日の予定に「お声がかかる」かどうか戦々恐々とした思いでお迎えの場に臨むという。「あなた任せ」の不安の渦巻く中で、唯一救われるのが自分自身の予定が既に入っている時なのだそうだ。誘われようと誘われまいと、応じられない状況が自分の意志を越えたところで既に決まっていれば、最後の最後まで予定が埋まらない不安を抱え続けるという状況に身を置かずに済ませられるというのである。これはかなり特異な例ではあるかもしれないが、こ

れに近い思いをかなりの親が抱えていることは事実である。すなわち、我が子の社会性を育てるための環境作りとして、できる限り長時間、同年令の集団の中に我が子が居られるようにしなければいけないという思い込みと、母親自身が絶えず人の輪の中に居続けなければまともな人間として評価されないのではないかという思い込みである。

### 期待される子ども像

通常、子どもらしい子どもとして大人から評価される子どもの姿とは「明るく元気で活発なひまわりのような」姿である。いいかえれば、太陽が好きで、裸足が好きで、冒険心が旺盛で、怪我也よくするし真つ黒になつて外を走り回っている姿である。

もちろんこれらを否定するものではないが、外遊びを奨励するがあまり、午前中は保育室に鍵をかけている幼稚園・保育所が少なからずあることを知り、ある

子どもが外で絵本をみている姿に出会ったとき、筆者はある種の恐怖を覚えた。

筆者は心理臨床家として長年「自分が自分らしくいられずに」不安定になっている子どもたちと出会ってきた。登校しなければいけないと頭では十分に分かっているけれど、身体が言うことを聞かず登校できずにいる「不登校」の子どもとの出会いは数知れない。

中学二年の二学期から登校できなくなったある男子は五年間の引きこもりの後、大検を経て好きなデザイアの専門学校に入学し成人式を迎えた時、幼い頃を振り返って「家でも学校でもなるべくはきはきと陽気にふるまい、〃明るく元気な子ども〃でいたつもりです。この〃明るく元気な子ども〃というイメージは周囲の大人たちの自分に対するいろいろな干渉をたちどころに消してしまふ、何ともいえない魅力があるのです。そのため僕はこの固定したイメージに自分のイメージを重ねようとして常に振り回され続けていました。

：情けない話ですが、僕は正直いつ自分が大人とよばれる年齢になって初めて解放され

た気がします。大人というのはそれぞれの社会的責任は重くなりますが、それぞれの趣味、主張は一応考慮されるようになるからです」と語った。

この彼の言葉は我々大人に対する痛烈な皮肉に聞こえる。そして我々の「人間観」「子ども観」「保育観」に対して厳しい見直しを迫ってくる。我々がこれまで意識的・無意識的に曖昧にしてきた根幹に関わるテーマとして極めて深刻に受け止めなければいけない。すなわち、親も保育者も子どもにとってよかれと思つての対応が、実は大人の思い込みによる押しつけ・干渉以外の何ものでもなく、その結果、子どもが最も自分らしくなく生きることを強いたわけである。



さらに、筆者は大学の授業で極めて興味深い経験をした。それは「気質」についての授業の際の発見であるが、自らの気質を把握するために「精研式、パーソナリティ・インベントリー」を実施した。その結果は、「分裂気質」「躁鬱気質」「てんかん気質」に分けられるのだが、三列に並べられた席順とこの気質の結果が実に見事に一致していたのである。席順はもちろん学生自身が自由に選択したものである。

つまり、前列には分裂気質の学生は一人もおらず、後列には躁鬱気質の学生は一人もいなかったのである。その発見から以後も注意してみているがその傾向は同様である。これをどう解釈するかであるが、分裂気質の特徴は「一人で生きることが安定の条件」であり、躁鬱気質は「他者と生きることが安定の条件」であることを考えると、前列には他者との関わりはあまり得意ではない分裂気質の学生が席を選ばないのは当然であり、後列には他者と関わりたい躁鬱気質の学生

が席を選ばないのは十分に納得できる。もちろんこの際の「他者」とは教師であり、教師との物理的距離が即ち心理的距離に他ならない。

多くの場合、教室の中では前の方に席を取る学生は真面目で熱心だと解釈されがちであり、教師の多くは「前の方に座りなさい」と指導する。

「人それぞれ」という個性尊重の考え方は、評価のなるところで子ども自身が主体的に選択したものがその意味があるのであって、そこに価値観が導入されると「指導」の対象となり、「子どものために」という大義名分の下に強制的に矯正が行なわれることになる。

さらに問題なのは数的に躁鬱気質の人間の方が圧倒的に多く、分裂気質の人間は少数派であるという点である。しかも職業に教師や保育者など、人と関わる仕事を選ぶ人間は躁鬱気質であることが多いはずである。そうなると教師や保育者と異なった気質をもった学生・生徒・子どもは周囲の大人から理解されにくい

ことが多々生じるだろうし、しばしば誤解されることになる。親子の間でも同様のことがいえる。すなわち、異なった気質をもった親子は感覚的に行き違いが生じやすい。十分な理解はできなくても、お互いが異なった存在なんだという謙虚ささえあればお互いを尊重し、その結果、不信感を抱くことは避けられる。

前述の不登校児も、周囲の期待を敏感に察知し摩擦を避けて先駆けて周囲が期待するところを演じ続けた結果、疲労困憊し、登校し学業を続ける気力も体力も失われてしまったと考えることができる。そして五年間の長きに渡って「引きこもり」を続けることでようやく疲労が癒され、カウンセリングを受けようという勇氣ある決断をし筆者と出会うことになった。

一週間に一回、一年間のカウンセリングの中で筆者は「あるがまま」の彼を受け入れ尊重し続けた。その結果、「先生は何も教えてくれなかった。だけど僕は初めて自分の内面を語り、誠実に対応してもらい理解

された。僕はだめな人間だ、生きる価値のない人間だと小学校五年の頃から悩み続けてきたが、このままの自分でいいような気がしてきた。行けども行けども闇が続いていた五年間だったが、トンネルの先の方に光が見えてきた」と語ってカウンセリングは終結した。「教育」や「保育」が「矯正」になったとき、それは「あるがまま」の姿が否定され、その結果、真面目で演じる「能力」がある子どもは一生仮面を被り続けることにもなりかねない。

### 社会性とは何か

教育や保育の名の下に様々な場面において、期待されるべき子ども像に向かって矯正する力が加えられているが、中でも突出しているのが前述したところの「社会性」に関わる項目である。

社会性とは児童臨床心理学辞典によれば、「個人の人格を知的側面、情緒的側面などというように分けた

場合、その一つの側面として考えられるもので、普通、対人行動、集団参加、社会的適応などの社会的行動が円滑に行なわれる程度や個人差、あるいはそれらの発達に関して用いられる概念である」と定義されている。すなわち、人間はこの社会において一人では生きていられないわけで、好むと好まざるとに関わらずお互いに何らかの関わりをもつことになる。従って、心理的にも物理的にもより広範な関わりがもてる方が生きやすいということになる。しかし、関わりが広い方が「人間的に価値がある」わけでも決してない。

例えば羨けの中で「偏食」は「悪」とされ、矯正の対象とされている。確かに偏食はあまり多くない方が生きていく上で「便利」である。震災やその他の食料が手に入りにくいとき外国に行ったときなど抵抗なく何でも食べられることは「便利」であり、楽しめる場が広がることは豊かに生きられることにつながる。

しかし一方で「好き嫌い」の感覚はそれと同じくら

い、いやそれ以上に大切である。何を食べても同じというのでは生きることに関心がなく等しい。「便利」であることがいつのまにか「価値あること」にすり替えられ、混同してとらえられていることに気づかねばならない。

同様に対人関係においても出来る限り好き嫌いなく誰とでも付き合っていけることが「良いこと」とされ「大人になった」と評される。これも「偏食」と同様であまりに好き嫌いが強すぎて日々の生活が円滑に進まないのは「不便」ではあるが、逆に誰とでも同じということとは「心が動いていない」ことであり、極めて無味乾燥な人との「くらし」ということになる。

さらに前述したように人に備わったそれぞれの特徴は「育てられ方」にももちろん影響されるが、かなりの部分人それぞれにもともと備わっている「気質」によって



決定されるように思われるし、さらにいうならばどんなに親が頑張つて「理想的」な子育てをしようとしても意識のレベルで操作しうるものではない。むしろ「なるべくしてなつた」結果をその子どもの「あるべき姿」ととらえ、好むと好まざるとに関わらず我が子の「あるがまま」の姿を受け入れていくほかない。

「氣質」とは窮地に立たされたときのゆとりのない状況下でその人が咄嗟にとる行動様式と考えたらよい。先に挙げた氣質検査による「分裂氣質」はまさに「自分と生きる」タイプであるから、混乱状態から復活するためには他者との関係を一切絶ち、自らの内なるメッセージに深く耳を傾け、ジワジワと復元していくのをゆつくりと待つことである。

一方、「躁鬱氣質」は「他者と生きる」タイプであるから、他者との関わりの中で、他者からの働きかけに影響されながら復元を果たしていく。

このように一口に「社会性」といっても、人によつ

て他者との心地よい関わり方やありようはそれぞれ大きく異なる。それを画一的にとらえ、しかも「その方が良い」と価値観を持ち込んでしまうとこれは問題の本質から大きくズレることになる。

さらに社会性についての世間の誤解を指摘しておかねばならない。子どもは生まれ落ちたときから集団を好み、また集団の中に入れる方がよいというのは誤りである。人と関わることを心地よく感じるいわゆる「社会性」とは、まず「個」が大切にされ、「自我」が育つていて初めて集団が居心地よく感じられるものだということである。「個」が大切にされないまま無理矢理「社会適応」を目指して集団に入れられた子どもは、「個」が育たないまま集団という「波のまにまに」漂う「藻」のような存在となってしまう。この状態は決して「集団参加」とはいわずに「集団に群れた」状態という。

ある小学校三年の不登校児は幼少の頃から「社会

性」を強迫的に信奉している母親が、園から帰るとすぐさま外でみんなと遊ぶことを強要してきた。そうしなくない子どもは門柱の陰で夕方までうずくまっていた。しかしそれもやがてバレてしまい翌日からほとんどかく物理的にみんなのそばにいなければならなくなつた。そのうちに彼は自らの思いを放棄した「波のまにまに漂う藻」として絶えず人と一緒でないと不安になる、いわゆる「群れの一員」となつてしまった。

### おわりに

最近の保育界・教育界では「個性」という言葉が頻繁に使われるわりには、むしろ今まで以上に「みんなと一緒」志向が強いように思われる。そしてそこでは「社会性」という言葉で「個」の存在が否定されている気がする。本来の「社会性」は生活する上で「みんなと協調する」ことが「便利」であることが多いということを前提として、そのために「人と関われる力」

を育てることの大切さを説いているはずである。

しかしながら我が国は伝統的に農耕文化であり、「我」の感覚は馴染みにくく「我々」の文化である。ところが戦後の急激なアメリカ文化の導入により子ども達の発達の中で「社会性」という側面が俄にこなれなままに取り込まれた。従つて、我々大人たちも十分な深い理解もないままに、誤つた形で「社会性」を強迫的に、形式的に子どもたちに押しつけた。その結果、子どもたちはわけのわからないまま「社会性」なるものに振り回されることになった。

子どもたちの中に生じる様々な「揺らぎ」はとりもなおさず我々大人たちの戸惑いそのものであることを考えると、まず我々大人たちが無理をしないで居心地良く生きることを目指すことである。

— 終 —

(津田塾大学ウェルネスセンター)